



宇野さんの、ドミニカでの愛称は「ウノ」。スペイン語で「一番」を意味するその言葉には、彼への信頼を感じさせる

のようすけ  
宇野陽亮さん (平川)



バレーは人を育てる。それを実践していきたい。

9月22日、ドミニカ国から宇野陽亮さんが帰国した。彼は青年海外協力隊（独立行政法人国際協力機構が実施する海外ボランティア派遣制度）としてドミニカ国の人たちにバレーボールを教えていた。彼はドミニカ国で何を教え、何を感じてきたのだろうか。

宇野さんは中学校からバレーボールを始めた。宇野さんの身長は160cm。バレーボールというスポーツは競技上、身長が高い選手が多い。そんな選手が多くいる中、宇野さんは自分で考えて動き、自主練習を重ねた。「一番小さかったので、一番練習しないといけないと思いましたから」と当時を振り返る。

大学でもバレーは続けた。1年からセッターとしてレギュラーに入り、トス回しの上手さに定評があった。バレーを続けていて良かったと思った。「仲間から「バレーは人を育ててくれる」と言われたことがあったんです。人にバレーを教えたい気持ちが海外でバレーを教えるきっかけになりました」仕事をしながら悩んだが、「ドミニカに行くことを決めた。森の多い緑豊かな国だった。最初は、文化の違いに戸惑いを隠せなかったが「そういうものなんだ」と気付けば楽になった。

2年間、国のすべての学校を回り、バレーを教えてきた。日本からの初代コーチとして今後のきっかけをつくれたことは、ドミニカにとっても貴重な財産だ。

「今後も指導する仕事をやっていきたい」と話す宇野さんの顔は2年前役場を訪れたときより自信に満ちあふれていた。

こゝろの声

▼ふとしたきっかけから空を見上げることが多くなった。昼は青い空で雲、夜は月と星をしばらく見ている。そうすると自然の素晴らしさに悩みなど大したことがないように思えた▼今回の特集でファイヤーフライファンタジーのリーダー坂梨さんに取材をしていた。取材が終わりに、気がつけば夜はとっぷりと更けていた。矢護川の夜空をいつものように見上げた。まるで降ってくるような星空に「この地球を守っていきたくすね」と自然に言葉がこぼれた。坂梨さんも同じ気持ちだった▼まちづくりの思いは、郷土愛から始まるのでしよう。郷土愛は人のつながり。これからも人のつながりを大切にしたい人生にしたいと思っています。

(江口)

Public relations  
OZU TOWN

広報 おおづ 2010 11

発行・編集 ■大津町・企画課  
〒869-1292 熊本県菊池郡大津町大字大津 1233 番地  
TEL.096 (293) 3111

ホームページ  
http://www.town.ozu.kunamoto.jp/

印刷 ■ホーア印刷株式会社  
※この広報誌は毎月1日に配達して再生紙製のA5サイズパンを使っています。

大津のことがもっと好きになる情報誌

広報  
おおづ

その見つめる先には何が――

特集  
グランパワーヒノクニ  
その見つめる先――

11  
NOVEMBER 2010